



虹のかけ橋



第50号/令和8年9月



兵庫県立但馬やまびこの郷

<https://www2.hyogo-c.ed.jp/weblog2/yamabiko-bo/>

こんなことはありませんか？

5月29日(金)、県立但馬やまびこの郷において、令和8年度不登校担当教員研修会・公開講座を開催しました。その中で、不登校児童生徒の支援についてこのような話がありました。



① チームで支援するには、どうしたらいいの？

② スクールソーシャルワーカーと、どうやって協働したらいいの？



③ 長く休んでいる子どもに、どのように関わっていけばいいの？

④ サポートルームをどのように運営していくとよいのだろうか？



不登校児童生徒の支援のヒントは4ページへ。



「不登校児童生徒の支援について ～SSW の視点から～」

関西学院大学 教授 馬場 幸子

スクールソーシャルワーカー (SSW) は、「社会福祉の専門的な知識、技術を活用し、問題を抱えた児童生徒を取り巻く環境に働きかけ、家庭、学校、地域の関係機関をつなぎ、児童生徒の悩みや抱えている問題の解決に向けて支援する専門家である」と定義されている(生徒指導提要2010)。SSWは、問題を児童生徒個人に起因するものとしてではなく、「人と環境との交互作用」で生じると考える。そして「人と環境との関係性を改善する」ことによって問題解決を図る。つまり、児童生徒とその家族の周りに助けてくれる人や組織がたくさんあり、彼・彼女らが本来持っている力を発揮しやすくなり、ニーズが満たされた状態になることを目指す。そのために、学校内で支援チームを形成し、地域では、関係機関とともに支援ネットワークを構築して、その児童生徒とその家族をサポートする。

SSWは、学校で生じている様々な課題に対応しているが、一番多いのは不登校に関する相談への対応である。一口に不登校といってもその背景は様々で、十把一絡げに「不登校の子に対しては…」と言えるものではなく、個別にアセスメントをし、個別のニーズに応じた対応を行う。アセスメントとは、情報を収集・整理し、現状についての評価を行うことである。アセスメントに基づいて支援の目標を立て、支援内容を考え、役割分担を行って支援を展開していく。教職員や、場合によっては地域の関係者などとも一緒にケース会議(個別支援会議)を行い、関係者間での共通理解の下で支援方針を決めるのが原則である。

不登校には、いじめられ経験、親のネグレクト、教員からの無理解、学校の雰囲気合わないなど様々な背景要因が考えられるが、子どもの権利という側面から考えたとき、不登校状態にある児童生徒の多くは、本来子どもが享受するはずの権利の多くが阻害された状態にある。子どもの「安心して生きる権利」、「自分らしく生きる権利」、「支援を受ける権利」などが奪われた結果、不登校に至っており、現在もそれらの権利を奪われた・未回復の状態であると言える。学校に行けず、家に閉じこもり、友人との交流や、地域の施設利用などもできていないとしたならば、それは、子どもが学ぶこと、遊ぶこと、文化、芸術、スポーツに親しむこと、仲間を作り、集まること等、「豊かに育つ権利」が阻害された状態であると言える。

不登校の児童生徒に“問題行動”や“非行”が見られる場合、その児童生徒が“わがまま”で“甘えている”ととらえられることもある。また、非行少年に対する厳罰化が唱えられている。だが、少年院にいる少年の6割は被虐待経験があり、幼少期にしっかりと大人から守られていない。厳罰では再犯率は下がらないことも統計上明らかである。なぜ非行に陥らざるを得なかったのか、その背景を考えなければならない。

不登校であっても、学校以外場で学習権が保証され、豊かな社会生活を送れているのであれば、不登校であること自体が問題とはならない。だが、不登校状態にあることによって、学習権が保証されず、社会生活に制限がかかり、将来の展望が見いだせず、自己否定・自暴自棄に陥ることもある。不登校の児童生徒への対応を考えると、我々が考えるべきは、「不登校の児童生徒をどう変えるか」ではなく、「大人がどう変わるか」「どう児童生徒に適切な環境(機会・時間・場所・人など)を提供できるか」かもしれない。



生徒指導提要(2022)では、「不登校児童生徒への支援の方向性」が次のように示されている。

不登校児童生徒への支援の目標は、将来、児童生徒が精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるような、社会的自立を果たすことです。そのため、不登校児童生徒への支援においては、学校に登校するという結果のみを目標とするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的自立を目指せるように支援を行うことが求められます。(pp. 224-225)

児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的自立を目指せるようになるためには、安全と安心が守られ、様々な人や機関とつながり、様々な可能性を考える機会が提供され、自分の持っている力を(再)認識し、意思表示・意見表明が支持・尊重され、見守られながら成功や失敗を体験し、将来に対する不安が軽減、展望を見いだせるようになることが必要である。だが、児童生徒の自己努力のみでそれらを実現することはほとんど不可能である。いかに大人が適切な環境を提供できるか(=支援の質)にかかっているのではないだろうか。

不登校の児童生徒を支援するとき、どのような目標を立て、どのような取組をしたらよいだろうか。大切なポイントを箇条書きで示しておく。

- 目標は、「本児が～になる」など、本人を主語に、肯定的な表現で記述する。
- 本人の強みを活かせる目標であることが望ましい。
- 3か月程度をめどに具体的で達成可能な目標を立てる。
- 本人が納得する目標であること。

反対に言えば、「適応指導教室につなぐ」といった目標は良くない。つなぐのは大人の支援行為であり、つないだからと言って、本人はそこに行かないかもしれない。また、抽象的で高すぎる目標は、実現不可能で、関係者に失敗体験と徒労感のみを残す。

もし教員等大人だけで会議を行い、目標を立てるのであれば、その結果を本人に伝え、本人が、「先生たち、私・僕のことをそんなに考えてくれたんだ。うれしいな。その目標だったら、頑張ってみたいと思う！そうならたらいいなって、私・僕も思う」と本人が前向きにとらえられる目標であることが重要である。本人の意向と無関係の押し付けの目標から、良い結果を生み出すのは困難である。

最後に。

児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的自立を目指せるようになることを目的とし、不登校対策支援プランをSSWと一緒に立ててみてください。新たな展開が生まれるかもしれません。

まずは、SSWを学校内の不登校対策チームのメンバーに入れてください。そして、教員とSSW、SCなど関係者が一体となり、児童生徒が守られ育まれる包摂的な環境を作り出せるような取組を展開していきましょう。

◆◆著者紹介(馬場 幸子／ばんば さちこ)◆◆

関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科・教授。博士(社会福祉学)。専門はスクールソーシャルワーク、子ども家庭福祉、社会的養護。兵庫県教育委員会SSW活用事業スーパーバイザー、兵庫県社会福祉審議会委員。著書「スクールソーシャルワーク実践スタンダード ―実践の質を保证するためのガイドライン 第2版」など。

不登校児童生徒の支援についてこんな視点はありますか？

① チームで支援するために

児童生徒とよく関わっている人や、支援のキーパーソンとなる人等数人が、子ども自身や子どもを取りまく環境の情報を収集し、アセスメントを行います。そして、校内委員会等で学年や学校全体等での支援のニーズを把握します。次に学校全体に関する対応で必要なことについて管理職を含めて決め、学校全体でチームとして支援をします。これらの支援を行うにあたり、コーディネートをするキーパーソンの動きがポイントになります。また、必要に応じてスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー（SSW）と協働することで、心理的・福祉的な視点からも支援できます。



② スクールソーシャルワーカー（SSW）との協働について

これまでは何か問題が大きくなってからSSWと連携するということが多かったですが、今は、SSWとの戦略的協働や未然防止のためのSSWとの協働という視点も大切になっています。SSWは①問題を抱える児童生徒が置かれた環境への働き掛け、②関係機関等とのネットワークの構築、連携・調整、③学校内におけるチーム体制の構築、支援、④保護者、教職員等に対する支援・相談・情報提供、⑤教職員等への研修活動という職務内容が文部科学省により示されているので、これをヒントに協働をしてみるのもよいでしょう。



③ 長く休んでいる児童生徒には

まずは、関係作りからスタートをします。その際、子どもたちの興味や強みにアプローチをすることが大切です。まずは子どもたちの強みや興味があることを知り、それを共通の話題として関係を構築し、会話の中から子どもたちの本当の気持ちを読み取ることが大切です。



④ 校内サポートルームの運営について

「好きなこと」や「楽しいこと」にもなかなか取り組めず、心のエネルギーが枯渇している不登校の子どもたちにとって、サポートルームは、学校へ足を向けたり教室に入ったりするための足がかりの場であると同時に、安心して休息できる居場所としての役割も求められています。そのため、利用する子どもたち一人一人のニーズを把握しながら運営していくことが大切です。



いずれもすでに取り組まれている内容かもしれませんが、不登校の児童生徒を支援するには無理なく継続することができ、子どもたちの心に寄り添った支援が大切です。